
エルフの競売

ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルフの競売

【Nコード】

N4469U

【作者名】

ミキ

【あらすじ】

エルフ少女と医者が送るハートフルコメディ。

その1（前書き）

某巨大掲示板の晒し用SSです。

その1

「そうそう、貴族街の西に新しい劇場ができただろ？あそこってさ、今週末の夕方に奴隷エルフの競売があるんだって」

「で、それが？」

「わかるだろ？お前の地位を利用してどうにか入れないかなあ、なんて」

友人はにやにやと嫌な笑みを浮かべている。
久しぶりに会ってみればこれだ。
昔からろくでもないやつだと思っていたが。

「入るのには金が必要だろ」

「そのへんは大丈夫。あそこのオーナーが、お前が良ければタダで入れてやるとさ」

男はため息をついた。
用意周到すぎて、頭にくる。

「オーナーの顔に泥を塗るなんて今のお前にはできないだろ？」

「週末か。わかったよ」

「いやー、話がわかるやつで本当に助かったよ」

友人は話が終わるとそそくさと出ていってしまった。やつが友人

じやなくなる日も近い。

週末、貴族街は人であふれ、劇場の前は馬車や荷車でまともにたち行きのできない状態だった。

「さあて、行きますか」

友人は鼻歌を歌いながら入り口へと進む。

「こいつのツレです」

長物を携える護衛は、男の顔を一瞥するとすぐに手元の羊皮紙へ目を戻し、扉を開ける。

「お通りください」

男は何も言わず、友人は後をついていく。

「すげえな、顔見ただけで通されちゃったよ」

「あいつは知り合いだ」

へー、と友人。既に興味は男の地位の高さから、これから行われる下衆な催しに移っていた。

席は二階の左翼最前席。競売には参加できないが、見物をするにはもってこいの特等席である。

「すごいところきちゃったな」

友人の顔は緊張と興奮で赤みがかった。

「お前のせいで借りができてしまった。いや、それが狙いか」

「なにぶつぶつ言ってるんだ。おい始まるぞ」

壇上にはオーナー、それと進行役の男が声高らかに、開幕を宣言していた。

そして、

「おおっ」

歓声があがる。

欲望むき出しの貴族達は食い入るようにそれらを眺めた。

白い肌。薄い髪色。宝石のような瞳。人形よりも作り物に見えるその種族を、人々はエルフと呼んだ。

「なぜ、みな裸なんだ」

男は異様な光景を前に自然と疑問が口から流れ出ていた。

「商人にはさ、刺青や焼きあとで自分の商品だつて示すやつがいるんだよ。でもそれって価値が下がるだろ？愛玩用なんだし。だから品評のためにむいちゃってるの」

友人は「なんだ、知らないのか」といった表情で男に顔を向ける。今日の商品は15人。そして大目玉もございます。

進行役の男は購買意欲を高めようと、透き通る声で謳った。続々と舞台裏から現れる純白の美少女たち。そして最後の15人目、会場にはどよめきが起きた。

「おい、なんだよありゃあ」

友人は息を飲んだ。

年は10ぐらい。肌は透き通るように白く、髪は上等なプラチナ。瞳はそれに呼応するよいに琥珀色を輝かしている。

まるで妖精だ。

会場にいる誰もがそう思い、神秘的な美しさに圧倒された。だがそれも一瞬で、貴族達は再び野獣のように目を輝かせる。

競売が始まった。

舞台に現れた順で競り落とされていく。

みなひどく美しいが、それでも琥珀色の目をした少女の前では見劣りしてしまう。

そのせいか、舞台端で競売を見守る商人たちは、普段よりも競り上がらない奴隷たちの値段にやきもきしていた。

「始まるぞ」

15人目、琥珀眼の少女が舞台の中央に立たされる。手錠を外された少女は必死に胸と恥部を隠そうとするが、隣に立つ商人に腕を絡めとられ、なすすべなく立ち尽くした。

「本日の大目玉！この一級品は未だ男を知りません！よい声を期待します」

またしても歓声。少女は赤面しながら怯えるように顔を傾ける。

「それでは始めます」

金がゴミのようだと男は思った。

それほど凄まじい勢いで競りあがっていく。最初に提示した額のゆづに20倍を超えた。しかし未だ勢いは衰えを知らず、欲望のまに金額ははね上がっていった。

金額が豪邸一つ建つほど膨れたとき、声があがらなくなった。

「もう一声、ありませんか」

進行役はまだいけると判断したのか、なかなか終わらせようとなない。

「お前、結構溜め込んでだろ？参加したらどうだ？」

「この席は参加不可だ」

「それはただの暗黙の了解だろ」

「貴族どもに目をつけられたくない。あの中には客もいる」

「あの子、可哀想だとは思わねえか」

「たかが奴隷だろう」

刹那、男の視線が少女の絶望が映る瞳と交わった。
何かを訴える眼。

男は立ち上がると、出口へと向かう。

「おい、どこいくんだ」

「競売は終わりだ。これ以上は額は上がらない」

友人を置いて、男は逃げるように劇場の出口へ歩を進めた。

既に日は落ち、昼は人で溢れていたここも、痩せた犬が餌を求めさ迷えるぐらい、閑散としていた。

ふっと息を吐くと白い靄ができる。冬は近い。

劇場を見上げると、屋根の先が綺麗な満月を半分、隠していた。家畜と一緒にだ、と男は思う。

意思とは無関係に飼い慣らされ、飽きたら殺される。ただただ抵抗することもなく、その短い一生を性の捌け口として使われるのだ。哀れみなんてなかった。ただ、最後の少女がこちらを見据えた瞬間、ひたすら嫌なものが込み上げて、その場にいられなくなってしまう。

なんでいまさらだと思う。

だからどうしたとも思う。

思考の泥沼から抜け出せず、ひたすら立ち尽くしていると、痩せた犬が擦りよってきた。

ここ最近、野生の犬猫は病気持ちだと言われ、見つかり次第すぐに殺処分にされてしまう。

こいつも長生きはできない。毛並みは良いからどこかで飼われていたのだろう。だけれど主人が死んだか迷子になったかで、悲運な運命をたどらずを得なくしてしまった。

男はポケットから丁寧に紙で包まれたパンを取り出すと、こまかく砕いてやり手のひらに置いて差し出した。

「これ、昼で出店で買ったんだ。食い切れなかった分、捨てんの勿体なくてな」

犬は鼻先を押し付け、それから男の手に噛みつかないように、だ

けれど必死にパンを口に入れていった。

全て食べ終わると手のひらをべろべろとなめ回し、哀愁に満ちた瞳で男を見上げてきた。

「もうないんだ。うちくるか？」

犬はしつぽを振り満足そうな表情を浮かべると、そのままどこかへ行ってしまった。

「ふられたな」

振り向くと友人がつきを背にして見下ろしていた。

「終わったか」

「ああ、お前の言う通りあれ以上は上がらなかったよ」

「誰が落とした？」

「漁船製造の成金親父だよ。壇上で喜びすぎて死にかけてたぜ、あいつ」

「そうか」

立ち上がると、べちよべちよになった手のひらを紙で拭いて、

「帰るのか？」

既に友人はこちらに背を向け帰路へ足を向けていた。

「ああ。楽しかったぜ。それと」

顔はこちらに向けていた。

「あいつらには神様なんていねーんだな」

月の光は逆光となり、友人の表情は見えなかった。

ただの思いつきだった。チャンスぐらいあっても神様は文句を言わない。

「御主人」

男は劇場からでてきた貴族どもを縫うように交わり、目的の人物へ近づく。

「おや、先生。こんなところで、珍しい」

「私も上の階で見物を」

「では、私の駆け引き、御覧頂けましたか」

「はい。流石一代でこれほどの財を成す豪腕ぶり。よい勉強になります」

男の言葉は嘘ばかり。駆け引きも糞もない。財力でものを言わすデキレースだった。

「いえいえ、それほどでも」

豚もおだてりゃなんとやらだ。やはり、機嫌はすこぶる良い。

「それですね、少し気になることがあります」

「あのエルフにですか？」

成金が指し示す先には、既に馬車へ乗せられ、鉄格子からこちらを覗く少女の姿があった。

「はい、壇上で掛けられている間、顔が赤かったでしょう。新種の流行病かと思ひましてね」

「なんだって」

成金は顔を青くする。

あれだけ大金をはいたのだ。病気持ちであればまるで割に合わない。

「落ち着いてください。私の思い過ごしかもしれませんし」

「ど、どうすれば……」

「とりあえず、私に診せてください。お代はこれからもうちをご贖肩に、ということ」

ずいぶん笑顔がうまくなった。世渡り上手は笑顔を作るのも上手なのである。

馬車へ近づくと、成金から借りた鍵で南京錠を外し、中へ入る。後ろでは成金が心配そうにこちらを見ている。

男は少女に近づくと、乳房に手をのせ心音を測るふりをした。

「さわら、ないで」

少女は弱々しく、言葉で抵抗をする。しかし、手を払われたり体をおしどかさするようなことはしなかった。

「言葉はわかるな、よし」

後ろを振り返る。

「御主人！脈や心音が聴きたいので少しここから離れてくれませんか？できるだけ雑音を排除したい」

何を言ってるんだ自分は、そんなこと関係あるか。男は吹き出すのを我慢して続けた。

「終わり次第呼びます」

成金はしぶしぶと馬車から離れていった。

「さて、じゃあ」

少女が息を飲む。

「神様を信じるか」

少女は質問の意味が理解できていないのか、呆氣にとられて男を見返してきた。

「神様にいてほしいか」

首を縦に振った。

イエスの意思表示。

「そうか、じゃあこれを」

男は内ポケットから怪しく光るナイフを取り出した。

刃渡り少女の人差し指ほど。柄はそれよりも短い。

少女は怯えた表情を見せる。

「好きなように使え」

男はそう言うのと、少女の長く美しい髪にナイフを器用に結んでいた。

「これで見えなくなった」

ナイフは姿を隠した。

「死にたくなったら首の脈を切れ。素人にはそれが一番楽だ。もし逃げれたなら」

保証はどこにもない。

「こいつの屋敷から南の森へ目指せ。そこにエルフの里があったはずだ」

それだけ言って馬車から降りた。

「あのエルフ、なんともありませんでした。お騒がせしてすいません」

神にでもなっ たつもりか。自分で言った言葉に吐き気を覚えた。

その2

少女は馬車に揺られ、短い人生の記憶を振り返っていた。年の離れた姉がいたが、彼女はいつの間にかいなくなってしまうていた。

両親が姉はもう帰ってこないのだと教えられた時、飯も食わず、三日三晩ひたすら泣き叫んでいた。声も出なくなった四日目の朝、姉を探しに里から出ようとしたら里の連中はひどく狼狽し、行つてはいけない行つたらお前はここにはもどってこれない、と何度も言われた。

理由は教えてくれなかった。父も母も自分をとどめることに必死だった。

——お姉ちゃんのことなんてどうでもいいの!?

決定的だった。母は泣き崩れ、父には一発強烈なビンタをもらった。

ますます理解できなくなり、その日の夜、ついに里を飛び出した。そして二日後、家族、友達、同郷の皆が恋しくなった少女は里へ戻ってきた。

子供の家出だから。甘い期待だった。

里は灰になり誰もかもがいなくなってしまうていた。

水も食料もなく、ひたすら森をさまよい、もうだめだ自分は死ぬんだ、と生きることを諦めようとしたとき、丁度通りがかりの奴隷商人に連れていかれ、なんとか生きながらえることができた。

あの時は、かみさまがいるんだと本気で信じた。

でもそれは仮初の偶像で、本当の地獄はここからなのだとすぐに知ることになった。

今日は満月だ。

エルフにとって神聖な日で、夜、ミミズクの宴が始まるころに月を見ると、生涯健康で幸せでいられるという伝承がある。

少女は別段信じてはいなかった。そもそもエルフの子供はみな健康で病気とは無縁の存在であつた。

だけれど、今日だけは信じてみたくなる。

これからの人生いいことなんてないだろう。

目の前でひたすらゴミのように扱われてきた同種たちを自分に重ねていた。

馬車の壁に体を預けると、背に鋭い痛みが走った。

ナイフ。

髪の中から刃の切っ先に触れ、存在を確かめた。

死にたくなったら脈を切れ

最後のチャンスかもしれない。屋敷につけば体を検められ、とりあげられてしまうかも。

だったら、だったら今。

ナイフは髪に結ったまま、刃を首筋にあててみる。

冷たい。

これが死なのだ。

たいしたことではない。

自分に言い聞かせたつもりだったが、刃は微塵も動かせない。そのときだった。馬車は大きく揺れ、そして動かなくなった。

「ついたぞ」

自分を競り落とした男の声。

肥大した腹を揺らし、下品な笑みを浮かべて格子の奥から眼を光

らせていた。

「降りろ」

裸同然、ぼろきれで身を隠し、馬車を降りる。

見上げた先は極上の屋敷。

ところどころ黄金色がちりばめられ、月光がそれを、不気味に光らせていた。

屋敷の中はきらびやかな近代装飾で埋め尽くされていた。

右も左も芸術品。

里育ちのエルフツ子の少女でもわかる。

これは、趣味が悪い。

だって、そうなのだ。バランスなんて考えずひたすら隅々へゲイジユツを埋めていくこのセンス。本人は良いと思っているのだろう。よけいたちが悪い。

「一生、お前をここで可愛がってやるからな」

尻を撫でられた。

これからされることを考えたら大したことはない。そう自分に言い聞かせ、落ち着かせる。

「今夜から相手をしてもらうぞ、風呂へ行ってこい」

言われるがまま、使用人と思われる人間へついていく。

ついた先はこれまた黄金。金、金、金。

里にあった大浴場に匹敵する広さ。

これが財の力。

ひたすら圧倒されていると後ろから声がかかる。

「脱衣所のお召し物を用意しておきます。お着替えが終わりましたら、そのまま廊下のわたくしめをおよびつけください」

丁寧な物言い。彼女は自分をなんて思っているのだろう。主人の玩具、ペット、家畜……。

「わたしはちがう」

何者にも聞かれぬよう、自分自身に言い聞かせるようにそつとつぶやいた。

体を洗い、浴槽へつかる。

この一年、自分だけが特別で、何もされてこなかった。

でも、そんな幻想も今日で終わりだ。純潔を奪われ、それで、

よじれた声がもれた。

よじれた声はより苦しげな泣き声と変わり、涙があふれて止まらなかった。

死にたいなんて嘘だ。

簡単に死ねるわけがない。

後ろ髪に隠したナイフの柄を握ると、結ってある髪のことなどおかまいなしに一気に引き抜いた。

毛が、たくさん抜けた。

白金色の毛が絡みついたまま、窓から差す月光にかざす。ナイフは鋭利に研ぎ澄まされ、妖しく光を返す。

美しい一品である。柄には装飾が彫りこまれており、刃はゆるく

波を描く。あの男は医者だと思って、もつと無機質な医療用のナイフだと思っていたが、こんなものだったとは。

息を飲んで観察していると、あることに気付いた。装飾は文字を崩してあるのだと。

月の光を背に、視覚に全神経を集中させ解読する。

エルフの言葉。古き良き、愛の言葉。そして、

「——お姉ちゃん」

生きなければならない。またあの男に会うために。

慣れない洋服を身につけ、さきほどのいいつけどおり使用人を呼ぶ。

部屋へ連れていかれてる間、一切自分には触れてこなかった。ただついてこいと言われ、それに従った。

少女に希望が芽生える。こいつらは、自分が無抵抗な子犬であるとかかをくくって、何もしてこない。いや、子犬だって牙はあるのだ。なめてかかれれば指を失う。

指なんかじゃすまない。生きるためだ。容赦するつもりはない。

「お連れいたしました」

屋敷2階の一番奥、南に面したその部屋はこの屋敷の中で最もひろい空間だった。

窓の外には白い丸。そして巨大な杉の木。

「お前を買ったことに後悔はない。いや、むしろ今が人生の絶頂だ」

成金男は上半身裸でツインベッドであぐらをかいている。

「近くに寄れ、お前の真珠より美しい顔を見せてくれ」

少女は音もたてず、ベッドへ歩み寄る。

「それでは私はこれで」

「ああいいぞ。休みをとれ」

成金男が笑った。

「音をたてても部屋には入ってくるなよ。護衛にもそう伝えておけ」

神はいるのだと少女は思った。

使用人が部屋からでていくと成金男の顔はおぞましいものへと変貌した。

「寄れといっておるだろう」

腕を掴まれ、ベッドへ引き倒される。腰巻にくくりつけた得物が腰骨に当たった。

「わしの顔を見ろ」

少女が顔を見上げる。
唇を奪われた。

必死に涙をこらえ、這ってくる舌を拒めずに受け入れる。

「お前、初めてか」

辱めるつもりで言ったのであろう。下品な笑みを浮かべて股をまさぐってくる。

指がふとももを撫でつけ、腰にまで伸ばそうとしたとき、

「ご、御主人さま、」

恐怖から口が開いた。悲鳴にもならない小さな抵抗。

「エルフには古い言い伝えがあります」

「ほう、なんだ、言ってみろ」

成金男は余興のように少女に耳を傾ける。

「男女のまぐわいは月の下で行います」

息を吸う。

「そして今日は満月。満月は神聖な日で、その、目をとじて祈りを捧げるんです」

嘘っぱちだった。それでも続ける。

「だから私と一緒に目をつむり、心の中で『神様、今日の日をありがとっ』と唱えてください」

「それがエルフの習わしか」

少女は躊躇なく深く首を振る。

「わかった。今日はお前の記念すべき日になるだろう」

下賤な笑みを浮かべ、成金男は眠るように、静かに目とじた。

「ごめんなさい」

必殺の一撃。

成金男は首筋に手を当てると目を見開いて驚嘆した。

そして力なく倒れこみ、動かなくなった。

少女は返り血をシーツでぬぐい、窓の外へ意識を移す。

脱出路はここ。大きな一本杉、地面は豊かに生えそろった芝、そして屋敷を囲む子供が抜けられそうな間の空いた柵。

条件はそろった。やるしかない。

音もたてず窓を開けると、窓際へ両足を乗せ、下までの距離を見つめる。足がすくむ、が今しかない。覚悟した瞬間が勝負なのだ。

怖気づいていたら朝になってしまう。

飛ばう。行け、自分は自由だ。飛べ――

飛んだ。

目の前の一本杉の枝へ指を伸ばす。

あと少し。

掴んだ。その瞬間自由落下が始まる。

だけれど枝は、耐えてはくれなかった。

失敗だ。一瞬で内臓が冷え切り。改めて自分がやっていることが無謀なのだとわかった。

落ちていく。

下に控える枝にもみくちやにされながら少女は転がり落ちていく。指を切り、腕を切り、脚を切りつけてくる。必死になってそこら中に腕を伸ばすが、返ってくるのは非情な仕打ちばかり。

そして、たいしてスピードを殺すことなく地面に叩きつけられた。息ができない。

すさまじい傷みが左腕を襲う。

少女が芝に顔を半分うずめ、片目で空を仰ぐ。月が、笑っていた。

目が覚めた。

未だ朝は来ず、遠くでミミズクが鳴いている。

体を起こすと体中が枝に切りつけられ、血を流しているのがわかった。

そして、左腕の我慢ならない鈍痛。手首の辺りは二倍に膨れ上がり、小指があらぬ方向を向いていた。

「っひうう、」

うめいた。親指を噛んで必死で声を押し殺す。

近くに警備をしている人間がいるかもしれない。気を抜いたら死ぬ。今この瞬間も死に囲まれている。

傷みに慣れ始め、周りの目を配ると、菜園の向こうに鉄製の格子柵が目に入った。

少女はよろよろと立ちあがり一歩ずつ進んでいく。今、誰かに会ったら……。そんな不安は痛みで頭の隅から消え去っていた。

菜園の花々を踏みつけ柵に手を掛け、上半身を押し入れる。

スカートの端が引つ掛かったが、ナイフを取り出し乱暴にきりつけた。

留め金を失った体は力のままに柵の外へ這い出た。

痛み、恐怖、不安。気を失いそうになる。だけどまだ終わってない。やることがあった。

隣接する広大な森へと一歩足を踏み入れると、足元の木の枝を拾い、そして、近くの木へ身を預ける。

右手に持つナイフを見つめる。

エルフと人間の外見上の決定的な違い、それは耳である。

人間とは違い、耳たぶが短く耳の頭がながい。たとえ少女の長い髪であつても、それを隠すことはできない。

町へ行けばすぐさま捕まり、また他の貴族へ売られるのはわかっていた。

だから、切り落とす。耳の頭が隠れるぐらいに。

刃は光を介し、自分の顔が映っていた。ひたすらこれから行つ自傷行為に恐怖でわなないている。

拾った木の枝を咥える。

ほとんど力が入らない左手で耳を掴む。

刃の切っ先を耳の頭へ押し付ける。少し刺さった。悲鳴が漏れる。体中から汗が吹き出し、頬に何かが伝う。だめだだめだ、集中しろ。少しだけ、ほんの少しだけ今よりも力を加えた。またもや悲鳴。歯が木の枝へ食い込んでいく。耳が焼けるに痛い。恐怖で刃を引き抜いてしまった。耳から温かいものが流れる。右手を押しあてて確認する。血。当たり前だ。

もう一度最初から、

今度は一気に切り落とす。刺して落とすのは頭を傷つけかねない。耳の頭を掴み、指に沿うようにナイフの刃を押しあてる。そして、

「うあつ」

口から木の枝をこぼし、小水を漏らした。

すぐさま左手にナイフを持ち変えると、逆の耳にも同じことを繰り返した。

朝を迎え、そのうち太陽は頂点に達し昼になった。

ボロボロの服、傷だらけの体。少女は乞食にしか見えなかった。

一点、琥珀色の眼だけが光輝いている。

男の住所を道行く人々に訪ね続けた。気味悪がれたが、髪をどかすと、「人とは思えない人形のような顔に、人々は警戒を解き、簡単に口を滑らせる。

男は、町はずれの海に面した入江のすぐ近くに住んでいた。

金持ち相手の開業医らしいが、あの成金のように金をかけず、ひたすら地味に生活しているように見えた。

家の前にたちドアを叩いてみる返事はない。どこかへでかけているのだろうか。

少しだけ休もう。少しぐらい、いいだろう。

少女は男の家に身を任せると、ゆっくりと瞼を閉じた。

その3

昼前、一般階級の多くが住まいを持つ、旧市街地へ足を伸ばした。海風が届かなくなると、休日らしい賑わいが男を出迎えた。市場はこの街の特産物である魚介が多くを占め、農作物や果実類は少ない。

長く住んできたのだ。生臭さには慣れっこだ。

「あら先生、今日はお暇なのですか？」

市場も半分を過ぎたころ、通りへ押し出されたように突き出た出店から、魚売りの夫人が気さくに話しかけてきた。

「週に一度、この日は休みをとってます。医者も人間ですからね」

少しだけ品物を眺め、踵を返す。

「先生ならお安くしますよ」

「いえ、まだ街を回る予定なので。帰りにまたお伺いさせてもらいます」

男は市場を見回るだけで、何も買わなかった。昨日の出来事が意識の大半を占め、街へ来た理由さえ忘れてしまっていた。

貴族街へにも、行こうか。

鉄細工屋へ頼んでいた、高精度秤が既に納品日を過ぎている。

だけど、昨日のことが嫌に膺の裏にこびりつく。

男は昨晩たいして眠れなかった。ベッドで横になっても眠気は来ず、朝まで掌の皺を数えていた。

男は旧市街から出ると、隣接する貴族街には入らず、小道を抜け小麦畑へと進んだ。

どこまでも黄金が連なる大地。地表の起伏が単色に影とゆがみを作り、それがまた絵になる。

ふと空を見上げた。

太陽と月がいる。

昼の月はそれほど存在を誇示せず、薄く白く、脇役に徹していた。エルフの言い伝えでは、満月が見える日は神聖な日であったはず。満月を見れば一生を幸福でいられる――

「くだらねえ」

目の前の石ころをおもいつき蹴飛ばした。

石ころは転々と跳びはね、子麦の森へと消えていった。

ずいぶんと遠回りをした、と男は思う。

小麦畑から貴族街へとできるだけ長く、時間がかかるようにして道を選び、歩き続けた。

ようやく、小麦畑を抜けると、街を囲む大層な石垣が見えた。

それを沿うようにして、入り口を目指す。

石垣にはこじき達が蔭に力なく座り込み物ごいをしている。

男は誰一人目線を合わせることなく、ひたすら石垣の終わりに向かっていった。

門に出た。その頃にはこじきの姿はなく、妙に小綺麗になっている。

石段に足を乗せたそのとき、脇に立つ憲兵から声がかかった。

「すみません、町外れの入江にお住まいの――」

名前を聞かれた。男は偽ることなく、はいと答えた。

「申し訳ありませんが、ご同行願いますか」

男の脳裏に少女の顔が浮かんだ。

成金男が殺された。それも奴隷のエルフに。

首の動脈を狙われ、即死。

成金男はベッドの上でペニスを勃起させ、半裸の状態だったらしい。使用人の話から、部屋にいたのは成金男と奴隷のエルフだけで、朝訪れると窓が開いていて、部屋には成金男の死体だけが残っていたとのこと。

まるで喜劇だ。

「それで、なぜ私か？」

「エルフ以外で最後に会った外部の人間があなただけだからです」

馬車の前でのやりとりを誰かに見られていたのであろう。

男は眉ひとつ動かさず昨晚の様子を語った。

「彼が競り落としたエルフの顔が赤みがかっていいもので、気になったんですよ」

「そのエルフが犯人です」

予想通りだったが、驚いたふりをした。

「そうでしたか……、で、検診がしたいと言ってエルフに簡単な検査と問診をしました」

「変わったところはありませんか？」

「流行病だと疑ってかかりましたが思い過ごしでした。彼女は健康でした」

憲兵の眉間が動いた。

「そうですか。犯人がわかってている分、すぐ捕まると思いますが、」

憲兵は言葉を切る。もごもごと口を動かし、男には、言うまいか悩んでいるように見えた。

「一応、この国では奴隷との性行為は禁じています。ただ罰則がなく、形だけのものではありませんが……。それで、その、あの競売自体に違法性はないのですが、やり方がずいぶん下劣で、」

この憲兵は青いな、と男は思った。

男ほどの地位ある人間は一言あれば、目の前の若造から職を取り上げることなど容易い。そんなやつに説教を垂れようというのである。

不安ながらもそれを凌駕する正義感。

男が口を開く。

「私も知らなかったとはいえ、参加をしたことには反省しています」

憲兵の顔から安堵が漏れた。

「申し訳ありません、口が過ぎました」

「気になさらず」

憲兵は簡単な調書を作り上げると、男の前に差し出した。

「ここにサインを」

晴れて自由の身になった。

外へ出ると、山の稜線に太陽がのしかかっていた。

鉄細工屋も魚売りのことも忘れ、子麦畑へ走り出す。

「やるなあ、あのガキ」

顔がにやけた。

エルフの里へ、無事にたどり着いただろうか。

ただナイフを渡しただけ。無責任な偽善。

だけでも、一人救えたのだ。いいことではないか。昨日あれほど悩んで後悔していたのが馬鹿みたいだ。

男は少しだけ、過去からの呪縛に開放されたような気がした。しかし男の淡い期待は、数時間後打ちのめされることになる。

その4

寒い。

頬に触れる潮風が心地よかったのは、日の光が身体を暖めてくれていたからだ。

太陽は姿を隠して、山の向こうから赤い光を雲へ照らしていた。目を覚ますと、頬は石畳のあとを残し、耳から流れ出た血の川が首筋を伝い服に黒い染みを作っていた。

体を起こして左腕を庇う様に座りなおす。腕は動かさなければ痛みはないが、ほとんど土に近い色にまで変わり果てていた。

医者であるあの男に診てもらおうか。支払えるお金はないけど、あの男は優しかったからなんとかなる、と思う。だからナイフを、視界の隅に何かがちらついた。

顔を向けると、街へ続くなだらかな小道になにやら小さく動く影がひとつ。

あの男だと思った。

少女は右腕について、よろめきながら立ち上がる。立ちくらみで視界がぼやけたが何とか耐えた。立ってみてわかった。影は自分の身長に比べて非常に小さい。

「あ」

小さな影の正体は、栄養が足りていないのか、腹にはあばら骨の浮いた、やせ細った短毛の犬だった。

「おいで」

しゃがんで目の高さを合わせると右の掌を差し出す。痩せた犬は警戒もせず、嬉しそうに尻尾を振って近づいてきた。

ばうつ。

ずいぶんと人に慣れている。元々飼い犬だったのだろうか。

少女は思う。

見捨てられれば、死あるのみか。

犬の頭を撫でる手が震える。この子は自分よりも厳しい状況にある。愛玩動物として飼われてる間は幸福だ。だけれど、一度外へ放り出されれば、狩りも採集も知らぬ箱入り育ちのその身は、困難に抗うことはできず、そのまま土へ朽ちる。

エルフの里では、生きるすべてをそれなりに教わってきた。畑を耕したし、釣りもできる。遊びでやった野兎狩りなんて、同い年のガキンちよの中では一番多くとれた。

あの頃はたくさん遊んでたくさん怒られた。好きな男の子もいて、春の月の下で告白を受けたこともあった。

でも、もうないんだ。

今日の月は少し欠けている。

姉はなぜ出て行ってしまったのだろう。今だから言えることだが、里は幻想に生きていた気がする。争いもなく、穏やかに生きていた。外の世界を知りたかったのか。狭い世界で夢を見続けるよりも人間の世界で現実を味わう、未熟な冒険心。あのしっかりものだった姉が、か。

犬の首へ腕をまわし、すぐるように抱きつく。首筋へ顔を押しつける。と何も言わず何もせず、呼吸だけをする。

ちよつと臭いなこの子。洗ってあげないと。

少女も犬も凍りついたようにその場で動かなくなった。

夜の海風だけを聞いて目を閉じ、意識は闇の中へ埋没していった。だから足音にも気付かなかった。

「だれだ」

首根っこをひっつかまれた。

慌てて顔を上げると、

「お前まさか、昨日の……！」

絶句した男がいた。

「あ、あの、」

「エルフの里へ行けと言っただろう」

それだけ言うと、男はドアへ腕を伸ばし、鍵をまわす。

「待つて、これを」

少女の手にはナイフが握られていた。光を弾き、妖しく光る。男は少女からナイフを受け取ると、丁寧に血をぬぐい胸ポケットへとしまった。

「返しに来たのか。そのためにここまで」

「それと！その彫つてある言葉、」

男は明らかな表情を見せた。

姉の名前——たとえ同姓同名の別人であつてもこいつの知り合いなのは間違いない。そして、ただの知り合いなどではない。

「知らんな、これは拾つたんだ。元々の持ち主の名前だろう」

「名前とは言つてない。それ、エルフ文字だから人間には読めない」

「！！っ」

面白いぐらいに鎌にかかった。

「とにかく、もうここには用がないんだろう？じゃあな」

男は無情にドアを開き、一瞥もせず入って行った。

「おねえちゃん、」

男の動きが止まった。

「おねえちゃんを返して。その名前——」

少女は続けようとするが、目の前がばやけ吐き気がこみ上げてくる。自分にとってのトラウマがよみがえり、意識を散らしていく。

「おい、どうした？」

膝についてこうべが垂れた。どこか遠くで男の声がする。ひどく狼狽し、声を荒げている。そして、目の前が真っ暗になった。

「私は世界を知りたいんだ」

姉は自分にそういった。

「この里はすごく平和でいいところだよ。でもね、たとえ困難が待ち受けてたとしても外へ出ることに自分にとっての可能性が——」

姉は耳まで真っ赤にして笑った。

「いやー、やっぱりなんか恥ずかしいなあ」

鼻の頭をぽりぽり搔いて、自分とは目を合わせないようにしている。

「だからさ、もっと私が大人になったらさ。ここを出るんだ」

寂しい顔を見せる。

「だからさ、あんたとはもう会えないかも。ねえ、私と離れたくない？」

またもや笑顔。

「あはは、うぬぼれ屋さんだ私。……あつ、泣いてる？ごめんごめん。ほらいい子だから」

姉の手が頭を触れる。やわらかくて大きい。

「私さ、里の外に好きな人ができたんだよね。うん？そう、人間だよ。みんなは人間は野蛮だって言って馬鹿にするけど、私は、」

空を見上げる。

「それでも彼が好き」

はるか遠い夏の記憶。思い出した、姉には里を出る明確な理由が

あった。

「——ちゃん」

「お、気付いたか」

天井にランプ。

「痛っ」

「動くな」

左にはあの男。腕へ針を通し、男の持つ手の方から小さな噴水ができていた。

「溜まった血を抜いている。怖がるな」

このまま全部の血液を抜かれてしまうような気がして、背に冷や汗が流れた。

ここは、ベッドの上で天井にはランプが轟々と輝いていて横では男が治療をしていて、そして自分は、真っ裸だった。

「あっあっ」

頬が赤くなる。

「そんなに痛むか？うちにあるやつで一番細いやつなんだがな」

「そうじゃなくてっ」

「ああ、体勢がきついのか」

男はそういうと枕を手に脚のほうへ。ありえないとわかっていても体が勝手に、

「嫌っ！！」

蹴った。しかも顔に。

「うが」

盛大に治療具をまきちらし、床へ後頭部から落ちていった。

「こおんのクソガキがあ」

腕をついてこちらを見る男の顔は鬼神そのもので、間違いなく自分は今からナイフでめった刺しにあう運命である。それでも、言わなければならなかった。

「裸、見ないで」

死の恐怖を超える羞恥心。年頃の少女は大の大人には理解できない存在である。

男はため息ひとつ、

「ガキには欲情しねえから」

堅く握った拳を緩めると、周りに散乱した治療具を拾い始める。

何やらぶつぶつ文句を言っていたが、少女は気付かないふりをした。しょうがないではないか、今ままで散々「それ」みたいなことをされてきたのだ。処女は奪われずにはいたが、ひたすら性的なイジメを受けた。

「……ごめんなさい」

「……ゆるさねえ」

顔がひきつる。ちゃんと謝っているのに、なんだそれ。大人げないやつだと少女は思った。

「ちょっと待ってる」

男は隣の部屋へ行き、戻ってくると毛布と薄く裂いた添え木、そして女性用の下着を持ってきた。

「あとは腕に添え木して終わりだ」

男は横に立つと、左腕へ器用にくりていく。

「本当に、さっきはごめんなさい」

「謝るならすんな」

まだ怒ってるし。

「ほらこれとこれ、寒いだろうし着とけ」

下着と毛布を投げつけられた。

「明日の朝、起きたらすぐに出て行け」

それだけ言うと男は部屋から出て行った。少女は言わなければならないことがあったのに、機会が奪われてしまって、行き場のない言葉が腹の中を舞う。

南の森の——私が生まれ育った里はもう跡形もなく消え去ってしまったのだと。

そして、姉の居場所を問いただすために。

そのためにここまでできたのだ。

少女は毛布を頭まで被ってランプの光から逃げるように目を閉じた。

その5

「おはようございます、つてあれ？」

朝、遠くで鳴く鶏の声に起こされ、そのまま男の部屋（だと思われる）に入ってみたのだが、誰もいない。家中くまなく探してみたが人っ子一人消え失せていた。

探索しているうちにわかったこと、男は一人で家族はいない。医者のかせにずばらな性格のようで、掃除洗濯ができていない。最後に、犬を飼い始めたということ。

キッチンには作りかけのドッグフードと新品の首輪があった。

「へたくそ」

ひどいありさまである。洗われてない食器が塔を作り、内臓と白身が一緒にミンチにされた魚がテーブルの一角に鎮座していた。

片づけることから始めよう。昨日言われたことなど空の彼方へ消え去り、頭の中は目の前にそびえるゴミの山の処理でいっぱいだった。とにかく昼前までにはと思い、せつせと食器を洗い始める。

キッチン周りの片づけはたいして時間はかからなかった。乱雑と散らばっているかのように見える食器やゴミにも、ある程度ルールがあるらしくそれを理解すれば別段苦労はしなかった。

片づけが終われば食事を作るは流れとして自然なわけで、他人の家の食材を勝手に使うことにまったくと言っていいほど躊躇はなかった。キッチン奥におかれた、大きな食材棚を開くと干し肉が三枚、パンがたくさん、塩付けの魚もたくさん。ここの家主の食生活が気になるところではあるが、流石に口にするものであるため、保存には気をつけているようだった。

オオムギでできた丸パンを三つ、手に取ると横から六分ほど切り

込を入れ、中にバターをしこむ。で、魚の白身『だけ』を薄くスライス、これまた中に押し込んでいく。

で、後は焼くだけ。

窯へは最初から適当な薪が放り込まれていて、火をつけるのにも苦労はしなかった。

テーブルを熱湯消毒を済ませた布巾でぬぐい、皿を二つ、焼いたパンを乗つけた。

うむうむ。完璧である。

牛乳がないか探しまわっていると、玄関戸口の開く音が聞こえた。あわてて、そのほうへ向かい、

「おかえりなさい」

男は大きな袋を抱え、そのわきには尻尾をふってこちらを見上げる犬がいた。

「あの、勝手に台所借りて、その朝ごはんまだだったから作っちゃいました」

男は何も言わず、キッチンへ向かう。

ほめられると思った。ここへ置いてくれるとも思った。

「お前が片づけたのか？」

「はい」

「これを作ったのはお前か？」

「はい」

他に誰がいる。

「俺が作っていたやつはどうした」

「あ、あれは失敗したやつだと思って捨て、」

一瞬、視界が真っ白になって目の前には床が広がっていた。
何が起こったのかわからなかった。

折れている左手で頬をなでる。だんだんとそこが熱くなっていく
のがわかった。

平手で打たれたんだ。体が飛んでいくぐらい。

「あれはあのまま蒸してから燻製にする。東洋伝来の立派な薬だ。
お前が価値を決めるな」

背筋が寒くなった。殴られたからではなく、怒られたからでもない。
この男に見放される、それは世界の終りに思えた。

「ごめんなさいっ。全然わからなくて、その」

「でていけ」

持っていた袋を投げつけられる。

中からは子供用のワンピースが姿を現した。

「これはやる。だから南の森へ行け」

「……ない」

「あ？」

「里なんてもうない」

沈黙が流れる。

「私の里は燃やされた。たぶん人間。里のみんなもいなくなった。みんな殺された」

「ウソだ。二年前、まだあそこには」

男ははつとして口をつぐむ。

「それでここに置けと？人間を代表して俺が責任をとればいいのか？それがお前の復讐か」

「そんなこと」

「お前はリスクだ。お尋ね者を匿うことは重罪、同じ刑に処される可能性もある。もしお前が俺に恩を感じているのなら、」

そんな言葉、聞きたくなかった。

「ここから出ていけ」

男の眼は本気だった。冗談の色は少しもない。だから、泣いた。

目頭が熱くなり、瞳に涙がたまる。

動悸が激しくなつて、横隔膜が揺れる。

床に額を押し付け力の限りむせび泣いた。

唯一の抵抗。男の言葉に何一つ間違いはない。反論なんてものは

存在しない。

こんなところで見捨てられるぐらいだったら、最初から構わないでよかった。希望なんていらなかった。ただの下衆な男の肉奴隷で十分だった。

「おい」

男に頬を片手掴まれ、男のほうへ向けられる。

「うちは託児所じゃねえんだ。おれは聖職者でもねえ」

少女は泣きやまない。男の手が鼻水でぐじょぐじょになっても離さない。

「はぁー、クソが」

男は手を離し、服の裾でぬぐうと、犬の頭に手を載せしばしみつめあった。

「飯食うぞ。お前のことはその時考える」

「ご飯、食べてくれるの？」

「食い物に罪はないからな」

4人掛けのテーブルに向い合いながら座る。

テーブルの下では犬が作りかけだったドッグフード（鮭のフレークと細かくちぎったパンを牛乳でこねくり混ぜたもの）を親の仇の

ように食い荒らしていた。

「うまい」

「あ、ありがとうございます」

正直すぎる。

あれだけ言いたいこと言って、年端のいかない女の子を泣かせたくせに、その張本人は何事もなかったかのように口にパンをつめこんでいく。

「お前の扱いだが、」

犬が食い物はもうないのかと男の足にすり寄った。

「大食いだな。急に食べ過ぎると体に悪いぞ。……っと、お前はど
うしたい」

男は犬から少女に目を向ける。

「……ここに置いてほしいです」

「なぜ」

なぜって、

「死にたくないから」

「正直だな」

男は最後の一切れを口の中に押し込むと、コップについてあった牛乳を一気に飲み干した。

「お前はここで家政婦ごっこでもするのか、料理洗濯掃除、とにかくき使っても文句は言わないか？」

「……、はい」

「夜の相手もか？」

ひぐつ。

「悪かった。今は冗談だから泣かないでくれ」

男は両手で顔を覆い肘をついた。

「な、なんでもっしますつ。よ、よ夜の相手でもっ」

「だからさ、冗談だつて……」

男はこちらに手を突き出し、指をみつつたてた。

「もしここにいたいんなら、これだけは守れ。ひとつ、家事をしろ。ふたつ、勝手に外へ出るな。みつつ、泣くな」

少女はうなずく。

「特にふたつ目は絶対守れ。俺とお前はすでに顔見知りだつてのが憲兵達にも知られている。知らぬ存ぜぬでは通せない」

うなずく。

「飯はうまかった。ごちそうさま」

男は立つと食器を流しへ持っていった。

「私がやります」

「ああ、じゃあ頼む」

「あの」

「なんだ？」

「置いてもらって、本当にありがとうございます。この御恩は一生
忘れません」

男は呆れたような顔で、

「さっきまであんなだけびーびー泣いて暴れたのに、変わり身の早い
奴」

ちよつとだけむつとした。でも感謝しているのはウソではない。
この身で払えぬであろう恩だ。

「午後からお得意様の検診に行ってくる。外出んなよ。暇ならこい
つに芸でも仕込んでおけ」

それだけ言って自室へと戻っていった。
ばうつ。

皿を洗っていると足の甲を枕にして犬がじゃれてきた。

「君、名前は？」

ばうっ。

「前のご主人さまにつけてもらった呼び名だよ」

ばうっ。

「それじゃあわかんないよ。これから、君が唯一の友達で名前教えてくれなきゃ、」

少女の目からしずくが垂れる。生き残れるんだ。ほとんどを失ったけどまた始められる。

こんなに生きてて良かったと思える日がくるなんて。

少女は目の周りを腫らしながら笑った。

その6

街のはずれの一角には一般階級の人間でさえ近付かない区域があった。屠殺場、孤児院、下水駐溜所、とにかく臭いものには蓋で、街の厄介者たちが押しくるめられている。

その中の孤児院は「厄介者」と「一般階級街」を隔てるように建てられ、街の始まりから500年、未だに蓋の役割をしていた。

「じじい、来たぞ」

男は玄関門横の鈴もならさず、ずかずかと入り込むと受付窓口に持っていたバッグを乱暴に置いた。

窓口の奥でロッキングチェアに座り、窓から入る西日に身を晒す老人があくびをしながら答えた。

「もう月末か」

「ぼけてんのか」

「年寄りは敬えクソガキ」

「来月分だ、確認しろ」

そういうと、男は異様に膨れたバッグは押しやって窓口の向こうへ落とす。

「何をかつかしてある。嫌なことでもあったか」

「ない」

老人は立ち上がり、大きな欠伸を一つ、そのまま男の方に向かい、バッグを拾い上げると窓口前で腰を落とし、見上げて歯を見せきた

「先月の7割ほどしかないぞ？」

「それでも十分足りる。足元見すぎだ」

「なんだ、景気悪いのか」

「いや、犬を」

男は頭の奥底から少女の顔が浮かびあがった。

「犬を二匹飼い始めた」

「ほう」

老人はたちあがり、札束の入ったバッグを部屋の奥の錠前が施された鉄製の箱へ詰め込んだ。

「ちよつとついて来い。話がある」

「なんだ？病気のガキの治療か？言っておくけどな。治療代はきつちりもらうぞ。こちらにも生活つてのがあるんだ」

「うちの子たちは健康だ。ただの世間話だ」

「だったらいい。早く帰らなきゃならん」

そう言つて踵を返そうとした男の手を老人が掴んだ。男はぎよつとした。皺くちやで感觸は骨と皮だけなのに、力強い。それよりも強い気持ちのこもった掌に驚いた。

「……わかつたよ」

男はこの孤児院の出だった。厳密に言えば逃亡者、脱走者と言つていい。

当時の孤児院は、子供たちが毎日をぎりぎりの食事でのし、病に侵されればまともな治療も受けられずほとんどが死んでいった。

国の援助は雀の涙で、物好きな富豪の寄付金と子供たちの職場である屠殺場と死体処理の仕事で成り立っていた。

こんなゴミ溜めいつまでもいられるか。

男には野望があつた。まともな職を得て金持ちになつて、そしてこの孤児院をもつと住みやすくして、誰も死なないようにして、みんな幸せになること。希望とも言つていい。それだけ望み薄な願いであつた。なぜならこの国の高貴職のほとんどが世襲制で、しかも一度貧民として生まれればろくな職に就けないのが現状である。男の立場からすれば自分の食いぶちでさえ怪しい。

だから正攻法とは言わない。プロセスがいくら泥に汚れて人に見せられぬ外道だとしても、勝てばいい、最後にキレイになればいいのだ。

チャンスは男が12歳の夏の日、突然やつてきた。

その日はひどい雨だった。夏の屠殺場は死臭に満ち、慣れぬものは近寄るだけで吐き気を催す。屋根からわ雨粒が滴り、死を待つ豚と業に順ずる者たちを蒸していった。

「なあおい、」

共に豚の首をはねていた同僚が手を休め、口を動かした。

「なに？」

「今日ってさ、あいつくるよな」

「あいつって？」

「あの入江のほうに住んでる医者だよ。二か月にいつぺん、医学の発展だとかぬかして豚とか牛の死体買っていくじゃんか。今日がその日だよ」

男は話半分聞き流し、驚くほど早く、撲殺と切断を繰り返す。

「きけって。この前来た時に息子を連れてきたんだ。後学のためだ、って。それでさ、——おい、聞けよ！」

同僚は男が振りかざした腕をつかみ、鬼気迫る表情で男の顔を見た。

「あと10匹。お昼前に終わらせなきゃ」

「お前言ってたろうが、変わるって。こんな仕事、あと何匹ぶつ殺そうが俺らの未来に何一ついいことなんてありやしねえ。だから自分を变えるって」

豚が鳴いた。産まれてから食料にされるためだけに育てられた家

畜が、同僚の声に触れ、本能から押し出される恐怖を口に出した。

「とにかく聞け。お前あるとき、熱出してここにこないで休んだだろ。だからそんな態度をとってられるんだ。だけど俺は見た。ちらつとだが、所長と医者と話している時、あのガキは俺らのほうにきてゴミを見るような目をして笑った。そんなことはいい。今更何言うこともない。けどな俺はあいつの顔を近くで見て驚いた。あいつは、あのガキはお前にそっくりだったんだ」

男は笑った。目には嘲笑の色があつた。

「それで？」

「わかってんだろ？あいつになり済まして、家業を乗っ取る」

「どうやって」

「家までついて行って、それで」

同僚は撲殺用の棍棒を持ち上げ、断頭台にいる頭だけの豚を叩き割った。

「こうだよ。俺たちは慣れてるだろ」

「それは豚にだ。人間じゃない。いかれている」

「法を犯してでも、やらなくちゃならないことがある。昔お前はそう言っただろ」

「死体の処理は？なり済ました後はどうする。俺はまともに文字も

読めないんだぞ。……たとえ殺しがうまくいっても、どうせばれる」

「お前は頭がいい、なんとかなる」

「運まかせかよ」

男が舌打ちした時、屠殺場全体を響かせる鐘の音が鳴った。

「昼食だ」

豚のエサと大差ない昼食をとった後、男は同僚から屠殺場奥の断頭置き場で隠れるように言われ、しぶしぶと了承しながらも、自分と同じ顔の人間を見ることに内心、興味で溢れていた。

遠くでひたすら虐殺を繰り返す同僚は、ときどきこちらに視線を送りながらも二人分の仕事をこなしていた。

そして、同僚の言った時間きっかり医者らしき装飾で着飾った中年とここいらではみない、整った服装をした少年が現れた。

驚いた。

自分にしか見えなかった。

歳も近く、背丈はまるで一緒。身なりを整えれば少年と全く変わらない。

医者は所長に金を渡している様だった。もともと、この国が管理する施設であり、個人で勝手に肉を売買することは違法とされている。それを子供達の手前、堂々と売り買いしているのだ。口止めは理不尽な暴力と解雇。生活費を他にあてにできない子たちは物

言わぬ羊となるしかない。

男は注視した。同僚がこちらを見て笑った気がする。それが、そんなことが彼の運命を決定付けた。

同僚はこちらに注意向け過ぎて、医者の子が近づいてくることに気づかなかった。そして、

肩が触れたのだと思う。

ただそれだけであつたはずだ。なのに医者の子は叫んだ。

—— お前、わざとだな。

同僚の顔が青ざめた。

謝っている、こちらからでは何を言ってるかまでは聞き取れないが、頭を下げ必死で謝罪を繰り返している。

男の背筋が寒くなった。

笑つたのだ。医者の子がにやりと。

医者の子は医者と所長に駆け寄ると、同僚を指さして唇を動かした。所長と医者と医者の子が笑つた。

そして、三人は同僚へと近づくと所長が同僚の腕を掴んでどこかへと行ってしまった。

同僚の顔を今後一切見ることはなかった。

その7

屠殺場の所長は大金を手に入っていた。そして同僚は消えた。

三日たつても帰つてこなかった。同僚は行方不明者として扱われ、屠殺場で働いていた人間の誰もがわかつているのに、誰もが疑問を口にすることはなかった。職を奪われたくなかった、そのために同僚の命は霧の中へと連れ去られていったのだ。

三日目の夜、男は孤児院の院長室のドアを叩き、目の下を真っ黒に隈を作った形相で押し入った。

「じじい！なぜ誰も何も言わない。見てないなんて嘘だ」

「わしもやつには問いただした。だが、働き手などどこにでもいると脅され、それつきりだ」

「国には言ったのか？人攫いは犯罪者だぞ！」

「すぐに憲兵を呼んだが、『疑い無し』だそうだ。昨日打ち切られた」

「ふざけんじゃねえ……」

体中の力が抜け、へたり込んだ。天井を見上げると染みが動いた気がした。寝てないせいだろうか、それらが集まり群を成して同僚の顔になった。最後に見たあの笑顔に。

「わしにはどうしようもない……。今ここで荒事を起こせば他の子供達の食いぶちがなくなる」

「だったらあいつはいいのかよ」

笑顔は染みに戻っていた。

「だから、言ってるだろう。どうしようもないと」

「てめえ」

男は院長の首根っこを掴み、力の限り持ち上げようとした。ろくに飯が食べていない男の力では院長の足が床から離れることはなかった。

「お前も金をもらったのか。ふざけんじゃねえぞ。人間のやることじゃねえ」

「本当にそう思っただったらわしを殺せ」

殺せるわけねえだろ。

冬の雪舞う頃、野犬に食われそうになったところ間一髪助けてくれた、命の恩人を。初めて会ったところからじじいだった。それでも親の様に慕い、今の今まで最も尊敬する人間だったやつを。

腕を下ろし、踵を返してドアノブに手をかけた。

「ここをでる」

「本気か」

「搜索願いは出すな。死んだことにしておいてくれ」

それだけ言って出て行った。その日もひどい雨だった。

そして、夜が明ける前、男は初めて人を殺した。

「おい、どこまで行くんだ」

「お前がいた部屋だよ、あそこからなら庭がよく見える」

「誰も住んでないのか？」

答えはなく、黙々とその場所へ突き進んでいく。このじじいもそろそろだな、耳が遠くなってから寿命を迎えるのはすぐだ、もう長くはない、とよるめく年寄りの足元を見ながら思った。

部屋には鍵などなく、ノブをひねると鉄とさびがはがれる音がして、ゆっくりと開いた。中は、整然としており、長らく誰も使っていないのか棚の上にほこりの層ができていた。

「いい眺めだろう」

目下に広がる庭を眺める。自分がいたときよりも花にや木に溢れ、走り回る子供たちも以前の自分たちとは比べようもなく幸せそうだった。

「お前のおかげだ」

院長がこちらを見つけた女の子に手をふる。女の子は不幸を知らぬような満面の笑みで振り返す。

「あほぬかせ。あんたが国に知られなくなったら毎月金を持って来いって言って脅しただろ」

以前よりも柔らかくなつたベッドに腰を落とし、両手で体重を支えるように楽な姿勢をとつた。

「それはお前が理由を求めていたからだ。いい言い訳になつただろ？それにわしはそこまで金額は要求しとらんぞ」

院長も机の下に隠れた背もたれのないイスを引つ張りだし、窓へ寄り添う形で座つた。

「ただの保険だ」

「嘘つけ。お前のような悪鬼がそんなヘタレたことするか。昔からいじっぱりなやつだ」

こちらも見ずに歯を出して笑う。

「で、話つてなんだ。まさか昔の思い出を語り合おうとでも？」

「そうだ」

男は頬を膨らまし、窓辺でたそがれるじじいに目を向け、立ち上がった。

「俺はもう死んだ。ここでの暮らしはなかったことになっている」

「お前、最近あの若いエルフを連れてないじゃないか」

男の体中の筋肉が硬直した。

「なんだ？その反応は。前によくここに連れてきたお前と同年ぐらいの美人のエルフだよ。よくガキ共のお守をしてくれていたじゃないか」

「あいつがエルフだって知ってたのか」

男は再び座りなおし、屈んで院長をにらんだ。

「日除けのフードと言って耳を隠していたつもりだろうが、あんなもん、すぐにわかる。白金の髪に琥珀の眼など人間にはおらん」

「奴隷だ。あいつは競売で買った」

「ふむ」

余計なひと言を噛み殺し、納得したとも言えない中途半端な反応をとる。

「お前は変わらん」

「だから」

「いや、いい。従属関係ができているなら問題はなかるう。この国は神経質すぎる。奴隷の反乱を意識しすぎて権利主張を根こそぎ奪っておるからな」

「結局家畜だからな」

「お前がそれを言うか」

「俺だから言えるんだ。俺もあいつも」

男はベッドに沿って寝そべった。勢いよく足で叩いたので部屋中に細かな埃がまっただ。天井をみつめると、作られてから相当長く経ったのがわかる。修繕でできたはりばての板が焼け茶色に変色していた。

「あいつはどっか行っちゃったよ。旅にでもでたのかな」

「そうか」

院長が立ち上がり、男の横に座る。腰骨が服の上からもわかり、仄かな死を匂わせていた。

「幼いエルフが、殺人を犯して逃げ出してのは知っているか」

院長がそうつぶやいた。

男は一瞬顔をこわばらせるも、横目で院長の背を見ると声色を変えず答えた。

「知っている。あんたがさっき言ってた奴隷の反乱だな。国が躍起になるのもわかるさ、教育が足りてない犬猫に噛みつかれたら赤っ恥だ」

「ちがう」

「なにがだ」

「わしが言いたいのはそのじゃない。お前、そいつを匿ってるだろ」

院長は振り向かなかった。けども背で語る威圧に男は圧される。

「何を根拠に。なんでもかんでも犯罪やってのけてんじゃないんだぞ俺は」

「若い憲兵、覚えているか？」

若い……、たぶんあいつだ。昨日の貴族街で自分をはっていた青臭いガキ。

「俺を取り調べていたやつか」

「そうだ。あいつはこの出でな。お前のおかげで職にありつけたようなもんだ。そいつが言っていたぞ」

そうか、見たことあるやつだと思ったら……。もしかしたら昔に話したことがあるかもしれない。だからおっかなびくりあんな態度だったのだろう。

「証拠がない。今度来たらそいつを首にしてやるといつてやれ。まさか恩を仇で返すなんてな」

「お前の言う通りだ。証拠はない。けどな、被害者の男はナイフで首筋を切られ、失血で死んでいる。で、凶器のナイフだ。昨日がかりで屋敷の刃物を全部調べたが、何一つかけてはいなかった。これは外から持ち込んだとは思えない、らしい」

「言いがかりだ！それで俺を凶器を渡した犯人だったなんて短絡す

ぎる」

「唯一お前がその少女に接触した外部の人間だ。それにまだ断定したわけではない。二三日中にお前の家を検めると言っていたぞ」

「それは、そいつの進言でか？」

「それはない。既に上の連中が決定していたそうだ。だからあいつはわざわざ、わしのところまで来て伝えてほしいと言ったんだ」

「最初から俺の家に」

「それは危険だ。勝手に接触したのが知られたら、あいつの自己判断で捜査が攪乱されたとして失職だ。あいつには嫁がいる」

男は起き上がり、胡坐を搔いて顔を両手で覆った。

「どうすりゃいいんだ」

「やっぱりか」

院長は初めてこちらを向いた。

「匿っているのは本当なんだな」

今更言い訳するようなこともなかった。それよりも現状に迫る危機をいかにして凌ぐかで頭がいっぱいになる。

「わしのところへ連れてこい」

「だめだ、そんなの」

「お前がガキ一人育てられるとは思えん。ここでなら同い年の子供いるし、面倒をみる人間もいる」

「あんたはどうする。あのガキは犯罪者だぞ。いつしよに首をふつとばされてえのか」

「最悪捕まっただとしても、わしとその子だけが犠牲になるだけだ」

「だからあんたは、」

「わしはもう十分生きた。ずっとじじいにいるのも飽きたんでな。だからわしにあの子を委ねてくれ」

「たったひとつの逃げ道だった。だからそれを受け入れざるを得なかった。」

「もし、あんたが捕まったらこの孤児院はどうなる」

「そうだ、それも言わんとおかんな」

院長はいつのまにか持っていた羊皮紙を二枚、男に差し出した。

「この管理証だ。拇印とサインでいい。書け」

「俺が、ここを看るのか!？」

「それがお前の夢だろう」

院長は唇をあげない齒を見せた。

「いつ言った。そんなこと」

「いつだったかのう。子供のころ、そんなことをわしに語っていたような」

「あーもういい。だけど俺の今の稼ぎがなければやっていけないだろう」

「それには心配及ばん。ここに診療所を作る。それに回数を少なくすれば、お前のお得意さんも見て回れるだろう」

院長は立ち上がり、机の上に羊皮紙を置いて男の答えを待たず部屋から出て行った。窓から望める風景は、何年も前に自分がいた地獄とはまるで変わり、ここに住む子供たちがはしゃいで走り回っていた。少女がここで暮らす方がリスクが少ないと言えばそういうわけでもない。入江の人里離れて暮らすよりも圧倒的に近い人間は増える。だけど、一生をあんなどころで終わらすよりは、この孤児院で過ごした方がよっぽどまだ。

幸せとはなんだろう。明日死ぬかもしれない身で豊かに毎日を満喫するか、それとも一人暗闇で光を断つか。どちらにせよ、選択肢はもうない。

出て行けなんて嘘だ。ひと時の感情でひどいことを言ってしまった。男は、少女に幸せでいてほしかった。

その7（後書き）

今日で終わらすつもりでしたが、長くなってしまい、完結にはもう
少しだけかかります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4469u/>

エルフの競売

2011年10月8日17時17分発行